

氏 名	浮 田 豊 うき た ゆたか
学位の種類	医 学 博 士
学位記番号	論 医 博 第 110 号
学位授与の日付	昭 和 38 年 12 月 24 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 5 条 第 2 項 該 当
学位論文題目	人歯の歯根尖端部周囲組織構造の逐年的推移について

(主 査)
論文調査委員 教 授 堀井五十雄 教 授 美濃口 玄 教 授 西村秀雄

論 文 内 容 の 要 旨

未完成歯の発育端部附近の組織構造は完成歯の根尖部歯周組織に比較すると著しくその性状を異にし、一種特有な微細造構を示すことははなはだ興味深い事実である。しかも両者の差異を知悉することは保存歯科学上まことに重要かくべからざることである。

著者は幼年期未完成歯の歯根発育端部にみられる特異な組織造構を有する歯髓歯根膜毬状体が増齡にどのような変遷をたどって完成、歯根尖端部の組織配置に推移するか、またその運命についてもなお一層鮮明にすべく本研究をころざし次のことを知ることができた。

未完成歯の発育端部は顎の内部にむかって大きく哆開し、この部の歯髓組織は幼若な繊維芽細胞より構成され発育端孔外へ膨隆逸出し、明らかに毬状となっている。歯が発育するにしたがい歯根の形成が進捗すれば、セメント芽細胞の活発な機能によって新生する細胞性セメント質は根尖孔附近に添加し、孔をしてますます細小なものに化せしめるのである。

一方広潤な歯根膜腔隙に向って膨隆する歯髓毬状体はさらに繊維性結合織によって被覆され、この結合織性被覆は根尖孔より一部孔内に侵入して毬状体を把握し、発育端部歯髓と根管歯髓および歯根膜組織とを明瞭に区別する特異な組織像を現わしている。

このように繊維性結合織をもって被蓋された毬状体の内部においては毬面に平行するように細胞成分が配列している。

また毬状体は増齡的にその周囲から漸次繊維化の傾向を現わし、しかもこの現象は次第に中心部に波及し、ついに歯髓毬状体とこれを被覆する歯根膜組織との間には組織的区分が不分明となり一連の組織構造を現わすにいたる。

一方毬状体を容れる広潤な歯根膜腔隙は歯根の成長とその尖端部に増生する細胞性セメント質の添加による上方からの圧縮に順応して漸次狭細化するのである。

また根尖端部とこれに対応する歯槽窩底壁との間には、歯髓へ往来する脈管神経をさけて骨梁が島嶼状

に新生され、これによって広潤な歯根膜腔隙は2階層となり本来の狭細な腔隙に推移するのである。

顎骨骨髓の脂肪化は歯槽窩の周辺より始まり、これが逐年的に顎の内部に波及する事実が認められた。また歯槽窩底壁の周辺には晩期まで疎性結合織の認められるものがあるが、これは根端形成未完了歯の発育端部に構成される毬状体の残遺せるものと考えられる。

以上のように毬状体を組織学的に観察した結果、発育期においてはこの毬状体は歯根の形成に対しては最も重要な役割を果たすものであり、これの保護については臨床医家の最も留意しなければならない必須の問題である。また歯根完成後においてもその残遺毬状体の一部は根尖孔よりの為害作用が菲薄多孔性の窩底壁を通じて、根尖の周囲組織に波及することを阻止する防禦装置とも認められ保存歯科学上真に興味ある組織像といえることができる。

論文審査の結果の要旨

幼年期未完成歯の歯根発育端部にみられる特異な組織構造は歯髓歯根膜毬状体と称せられ、機能上もはなはだ重要なものと目せられているが、これを中心として歯根尖端部周囲組織が加令とともにどのような変化をたどるかは、たんに口腔解剖学上のみならず、歯科临床上にも少なからず重要な問題である。著者は9才から63才にいたる16例の顎周囲組織を附した歯牙について連続切片標本を作製して、その逐年的変化を仔細に観察した。

その結果歯髓歯根膜毬状体は歯牙発育期においては、歯根の形成にもっとも重要な役割を果たすものでありこれの保護は臨床歯科医のもっとも留意すべき事項であり、かつ、また歯根完成後においても、毬状体の残遺組織は根尖孔からの為害作用が菲薄多孔性の窩底壁を通じて、根尖周囲組織に波及することを阻止する防禦装置の役目をはたしていることがわかった。本研究の結果は解剖学上のみならず、保存歯科学上にも重要な示唆にとむもので、したがってこの論文は医学博士の学位論文として価値あるものと認定する。